



湯之奥金山遺跡

第2次調査概報

1991. 3



山梨県下部町
湯之奥金山遺跡学術調査会
湯之奥金山遺跡学術調査団

序

下部町は、山梨県の南部に位置し、面積は130.76km²でその大半の81.5%を山林が占め、その山間地を縫うように富士川の支流として、権田川、三沢川、反木川、柄代川、常葉川、下部川があり、各流域に集落が連なり耕地が開いていますが、畠地は急傾斜となっています。

町の歴史は古く、人が居住はじめたのは常葉、古閑及び中之倉地内から発掘された土器や、石器類から推察すれば、約3,000年以前と思われますが、その他は文献の微するものもなく、唯11碑、伝説等において想像するに過ぎません。言い伝えによると、下部温泉は景行天皇の御代に発見されたといい、また、湯之奥や川尻の金山が栄えた時代もあります。本町では、ふるさと創生事業として湯之奥金山遺跡調査研究と、保存活用にのりだし、平成元年度より3ヶ年計画による年次別計画を立て、文化財調査を行い、全国に遺跡の紹介をし、且つ保存活用に取組んで参りたいと存じます。

第1年次は、調査団の発足と学術調査でありましたが、第2年次は、発掘調査、古文書調査、民俗調査等々は勿論の事、調査範囲を拡大し科学的分野からの電気探査での地質調査や昨年に引き続いての航空測量等、帝京大学山梨文化財研究所や各分野の方々のご協力をいただき実施してきましたが、この度そのまとめとして第2次調査概報を刊行することになりました。

今後この報告書が我が国鉱山の歴史を解明するための手がかりとなることを期待しています。発掘調査から整理、及び報告書作成までの間、ご指導、ご協力を賜わった鷲沢林務事務所をはじめとする関係機関各位の方々、並びにお忙しいなかをご寄稿いただきました先生方に改めて厚くお礼申し上げます。

下部町湯之奥金山遺跡学術調査会
会長（下部町長）　上橋　精一

一　目　次

I	はじめに	1
II	湯之奥金山遺跡第2次調査の経過	2
III	中世・近世の湯之奥金山関係年表	3
IV	遠隔観察	8
V	坑道調査所見	13
VI	第2次考古学調査の概要	15
VII	第2次民俗調査の概要	24
VIII	第2次石造物の調査	29
IX	地中レーダー探査報告	33
X	おわりに	36

湯之奥金山遺跡学術調査会名簿
湯之奥金山遺跡学術調査団名簿
表紙写真（上から）
湯之奥金山遺跡坑道
下部町門西家住宅
富士宮市竹川家文書

二　例　言

- 1 本書は、山梨県西八代郡下部町湯之奥の東に位置する毛無山を中心とした山塊をもつ湯之奥金山遺跡の第2次調査概報である。
- 2 この調査は、湯之奥金山遺跡学術調査会及び調査団が湯之奥金山遺跡の歴史的研究と記録の作成及び保存活用を目的に、多分野にわたって行った学術調査であり、3年次計画の第2年次にあたる。
- 3 湯之奥金山遺跡第2次学術調査は帝京大学山梨文化財研究所のほか、山梨学院大学・信州大学・東京大学・帝京大学・日本大学・國立歴史民俗博物館・シン航空写真株式会社等多くの大学・機関及び研究者のご協力を得て行われた。また、佐渡高等学校教諭の小笠原也氏及びテラ・インフォメーション・エンジニアリングの渡辺廣勝氏には、調査にあたり多大なご指導、ご助言を賜わり、ご執筆を戴いた。
- 4 本書は調査団会議の検討を経て、文末に記した調査員がそれぞれ分担執筆した。

I はじめに

下部町湯之奥金山遺跡の第2年次学術調査は、初年度にみられた発掘資材の現場への運搬、野営生活による調査活動の途感いにも慣れ調査は大幅な進展をみたことをまずご報告したい。

考古部門ではテラスと呼称される遺跡地域内の平坦面域の調査が進められ、その分布状態の把握に力が注がれ、かつ、その平坦面上の発掘調査が行われ、遺物をはじめ、遺構の確認調査が進み、その性格についての把握に向け調査が進展した。

この結果、平坦面域にはその特徴的な構造から、幾つかのグループ分類されることが可能となった。このことは中山金山遺跡の金山操業時の姿を究明することに重要な資料となることは当然である。

また、平坦面域調査と同時に金山遺跡の全容把握に重要な坑道調査も地質部門を中心に行われ、主に坑道遺構の分布状態の把握に力が注がれ、平坦面域における遺構との関連が追及された。

坑道遺構そのものについては、他の金山遺跡との比較研究も進められたが、当金山は堅に対し横幅が狭いという戦国期から近世初頭にかけての特徴をもっていることも確認されている。

また、今回の第2年次調査では地中レーダー探査も実施し、地中の遺構の確認にも取組んだ。この結果、探査の対象となった平坦面域は埋め土による造成台地で、地山を削った様子ではなく、各ステップごとに拡大、積み上げられたものとの調査所見が明らかにされている。

さらに、発掘調査による出土品の中に陶磁器片の資料が得られたが、時代的には17~19世紀がある程度中心となっているものの、今回の第2年次調査では、戦国期を特徴づける陶磁器の確認が出来たことは貴重な成果であったと言える。このことは中山金山の操業開始時期に大きな係わりをもつだけにその意味は重要である。

また、今回は石造物の調査から、民俗部門では、中山金山、内山金山に関する社会組織の解明に向けての調査、口承文芸の聞き取り等の調査や、古文書班による門西家文書や下部区有文書などの調査が行われ、その面からも中山金山遺跡の実態解明に力が注がれた。

このような各部門における調査の進展に合わせ、航空機と地上とによる測量調査の結果、その全体像が把握される遺跡全体の測量図も完成したが、この中山金山遺跡の規模の大きさを改めて

知ることが可能となった。

今後はこうした歴史事実の具体的結果である当時の痕跡をもとに、どのように歴史を復元するかといった課題に取組むことになるが、この第2次調査報告をもとに多くの皆様に考察していただき、有益なるご助言を賜われば幸いである。

(谷口一夫)

見学会風景



II 湯之奥金山遺跡第2次調査の経過

湯之奥金山遺跡の第2年次調査は、主に平成2年の7月から8月にかけて行われた。昨年に引き続いての発掘調査、古文書調査、民俗調査及び中山金山遺跡の全体像把握のための測量調査等に加え、今年は新たに地中レーダーによる地中探査も試みられた。また、遺跡説明会及び記念講演会を開催し、本金山遺跡に対する理解を広く求めてきた。以下に第2次調査の経過の大要を記したい。

平成2年4月13日（金） 湯之奥金山遺跡学術調査団第3回会議

- 5月5日（土）・6日（日） 下部町内古文書調査、大炊平、内山・茅小屋金山踏査
5月23日（水） 打ち合わせ会議
6月19日（火）・20日（水） 中山金山踏査
6月29日（金） 中山金山遺跡第2次発掘調査の打ち合わせ会議
7月2日（月） 平成2年度下部町湯之奥金山遺跡学術調査会総会
7月17日（火） 県総沢林務事務所立合い発掘調査範囲確認測量
7月19日（木） 荷物一部を登山口まで搬入
7月20日（金） 中山金山遺跡発掘調査のための設営
7月21日（土）～23日（月） テラスの下草刈り
7月22日（日） 湯之奥金山遺跡記念講演会
7月25日（水）～30日（月） テラスの下草刈り及び中山金山遺跡発掘調査、坑道確認調査
8月1日（水）～4日（土） 地中レーダー探査
8月1日（水）～5日（日） テラスの下草刈り及び中山金山遺跡発掘調査
8月7日（火）～9日（木） 中山金山遺跡発掘調査及び坑道確認調査
8月11日（土）・12日（日） 中山金山遺跡発掘調査及び石造物調査、石材鑑定
8月17日（金）～21日（火） 中山金山遺跡発掘調査及び地質調査
8月21日（火） 石造物調査
8月24日（金）・25日（土） 中山金山遺跡発掘調査及び地質調査
8月25日（土） 中山金山遺跡第2次発掘調査現地説明会（一般公開）
8月29日（水）・30日（木） 中山金山遺跡発掘調査の撤収作業
10月9日（火） 中山金山遺跡第2次発掘調査検討会
10月10日（水） 湯之奥集落民俗調査
10月28日（日） 湯之奥集落民俗調査
11月12日（月）・13日（火） 多田銀山（兵庫県）など視察
- 平成3年3月2日（土） 金山遺跡全体測量図検討会
3月31日（日） 湯之奥集落民俗調査

（日原ゆかり）

III 中世・近世の湯之奥金山関係年表

まえがき

古文書班は昨年度、門西家文書と下部区有文書などの整理を行った。本年度は整理した古文書中から見出した金山関係の文書の解説、および様々な史料集などに採録された古文書から、金山に關係する文書を探し出し、湯之奥金山の実態追及に努めた。その結果、少しづつではあるが、具体的に金山の実態が明らかになりつつある。

今回は本年度までの成果から、古文書を基礎とした場合に中世・近世の湯之奥金山の歴史はどうのようなものになるかということで、関係年表を作成して報告したい。考古班の出土品の時期編年や石造物班の現地に残る石造物の年代などと、古文書の側から明らかになった事実をもとにての画期が重なれば、湯之奥金山の稼業時期がある程度見当付けられると考えるからである。

また、湯之奥金山は武田信玄の隠し金山といわれているので、この年表においては武田氏が開闢した金山についてはできるだけ事柄を探録した。なお、湯之奥金山は峰を越えて反対側の富士金山とも密接な関係を持つので、富士金山にも留意した。

ただし、これはあくまでも執筆分担者（笠本）が知りえた範囲である。今後、付け加えるべき事実などのご教示をお願いしたい。

凡例

文末の（ ）内の番号は『新編甲州古文書』の文書番号を示す。門西家文書の番号は昨年度整理した際の目録番号。なお、旧門西家文書というのかつては存在したが、現在は伝わっていないものである。『静岡県史料』の場合には第何頁何頁の順。その他出典が示してある。

元号 年(西暦)	月・日	内 容 (出 典)
天文3年(1534)	6月4日	穴山信友、金山である黒桂山・同芳山の代官職を某に命ずる(1568)
天文12年(1543)	7月5日	穴山信友、佐野縫殿左衛門尉へ竹進上に關係して判物を出す(門西家文書1)
天文13年(1544)	5月1日	穴山信友、村田善九郎などに芳山の小沢筋線を命ずる(1957)
天文13年(1544)	6月	武田晴信、金山の佐渡守に10貫文を預け置く(689)
天文13年(1544)	3月29日	大庭山に關係して代物覚が書かれる(門西家文書4)
天文19年(1550)	7月3日	穴山信友、黒桂金山の望月善左衛門に新恩を与える(1958)
天文20年(1551)	8月2日	今川義元、太田掃部丞に富士金山へ上がる荷物を通過させる(『静岡県史』2-435)
弘治2年(1556)	11月15日	穴山信友、佐野縫殿左衛門尉へ山作の仕事にたいし諸役を免許する(旧門西家文書)
永禄3年(1560)	2月11日	穴山信君、望月善左衛門の所持する犬の保護を命ずる(1959)
永禄3年(1560)	12月9日	今川氏真、朝倉六郎右衛門尉に梅ヶ島金山の掘問などを安堵する(『静岡県史料』3-128)

永禄 5 年 (1562)	1 月	武田信玄軍が北条氏政に味方して武藏国松山城を攻めたさい、金堀衆を利用する (『関八州古戦録』)
永禄 6 年 (1563)	5 月 26 日	今川氏真、駿河の梅ヶ島金山に関係する安部西河内の棟別役を免除する (『静岡県史料』 3-129)
永禄 10 年 (1567)	12 月 25 日	穴山信君、望月善左衛門尉に新恩を与える (1960)
永禄 10 年 (1567)	12 月 25 日	穴山信君、黒桂金山の望月半次郎に名字状を与える (1961)
元亀 2 年 (1571)	2 月 13 日	武田信玄、駿河深沢城攻撃に参加した中山の金山衆 10 人に糧 150 倍を与える (判物証文写)
元亀 2 年 (1571)	1 月	武田信玄、駿河深沢城攻撃に金山衆を利用する (『御殿場市史』)
元亀 2 年 (1571)	2 月 13 日	武田信玄、深沢城攻撃に参加した金山衆に諸役等を免除する (芦沢兵部左衛門尉 -754、保科善左衛門尉 -809、田辺四郎右衛門尉 -834、古屋清左衛門 -902、保科喜左衛門 -2323、中村与左衛門尉 -2244、中村段左衛門尉・田草川新左衛門尉 -「新編式州古文書」上巻 403 頁)
元亀 4 年 (1573)	1 月	武田信玄、三河国野田城攻撃に金堀衆を利用する (『家忠日記』)
天正 2 年 (1574)	1 月 16 日	穴山信君、駿河富士郡麓郷の棟別諸役を免除する (『静岡県史料』 2-436)
天正 2 年 (1574)		武田勝頼、遠江高天神城攻撃に金堀衆を利用する (『常山紀談』)
天正 2 年 (1574)	閏 1 月 24 日	武田勝頼、秤師の守随などに商売の諸役を免許する (385)
天正 2 年 (1574)	12 月 23 日	武田勝頼、金山衆に知行安堵を行う (芦沢兵部左衛門尉 -753、池田東市佑 -769、田辺四郎右衛門尉 -835、古屋清左衛門 -「甲斐国志」卷之百四)
天正 3 年 (1575)	5 月	武田勝頼、三河国長篠城攻撃に金堀衆を利用する (『当代記』)
天正 5 年 (1577)	12 月 19 日	穴山信君、竹河肥後守に麓金山の堀間などを安堵する (『静岡県史料』 2-437)
天正 8 年 (1580)	1 月 26 日	穴山信君、湯之奥の文右衛門に家一間分の諸役を免許する (門西家文書 5)
天正 8 年 (1580)	6 月 19 日	武田勝頼、田辺民部右衛門尉に馬 1 歩分の諸役を免除する (2382)
天正 8 年 (1580)	1 月 13 日	穴山信君の家臣有泉昌輔、麓金山の望月弥助に堀間等を安堵する (『静岡県史料』 2-437)
天正 9 年 (1581)	2 月	穴山信君、黒桂金山の望月土佐守に官途状を与える (1963)
天正 9 年 (1581)	8 月 20 日	武田勝頼、黒沢山境の判決を下す - 金山に関係する可能性もある (1677)
天正 10 年 (1582)	3 月 6 日	北条氏政、富士金山衆・麓衆を大宮司に付属させる (『静岡県史料』 2-438)
天正 10 年 (1582)	7 月 18 日	北条氏の家臣黒沢繁信、金山衆に戦況を知らせる (823)
天正 10 年 (1582)	11 月 26 日	徳川家康、守隨彦太郎に甲州金秤子のことを安堵する (388)
天正 10 年 (1582)	12 月 5 日	徳川家康、金山衆の古屋小兵衛に知行を安堵する (903)
天正 11 年 (1583)	4 月 21 日	徳川家康、金山衆の田辺佐左衛門尉に諸役を免除する (836)

天正11年（1583）	4月24日	徳川家康、金山衆に商売の諸役などを免除する（芦沢兵部左衛門尉・755、池田東市佑一770、中村弾左衛門・依田平左衛門・大野将監・風間庄左衛門尉・田辺清九郎・古屋次郎右衛門尉・田辺四郎左衛門尉・依田宮内左衛門尉 837）
天正11年（1583）	4月21日	徳川家康、黒川金山衆に馬1疋分の諸役を免除する（838）
天正11年（1583）	5月3日	徳川家康、富士金山衆の太田伊賀守等へ今後城攻めの時奉公することを条件に脚次之普請役を免除する（『静岡県史料』2-438）
天正11年（1583）	6月2日	徳川家康、金山衆の田辺佐左衛門尉に知行を安堵する（839）
天正11年（1583）	10月5日	徳川家康、分国中に守隨の秤で黄金の商売をするようにと命ずる（389）
天正16年（1588）	後5月14日	徳川家康、安倍金山の地域に棟別諸役を免除する（『静岡県史料』3-134）
天正19年（1591）	12月2日	加藤平助、湯之奥の文三に永3貫500文で村の請納を命ずる（旧門西家文書）
慶長3年（1598）	3月2日	湯之奥村、細【四兵衛・寺】孫助の証文で5石4升の請納を命ぜられる（門西家文書10・61）
慶長4年（1599）	4月24日	浅野忠吉、青柳の清八と黒沢の清七に信濃青柳金山の堀間の頭を命ずる（1678）
慶長7年（1602）	4月19日	志村甚之助、富士金山より中山金山へ掘る堀間の確認をする（『静岡県史料』2-439）
慶安3年（1650）	7月23日	内山金山の運上間歩の水抜きについて内山の市郎左衛門などが代官に訴える（門西家文書11）
慶安4年（1651）	7月20日	この日に作られた湯之奥村の明細覚には金山のことは出てこない（門西家文書12）
万治3年（1660）		「河内には、中山と云所より出る金の位悪し、但在々幾も有之と云」（小峰弘致『甲国聞書』）
寛文1年（1661）	閏8月21日	半岡道直、佐野半左衛門に黒桂金山の封を切るので巡上を念入りにすると命ずる（1753）
寛文5年（1665）		間歩が盛り運上金六分を公儀が取り四分は堀間に渡す、これにより間歩主等がくたびれ退転（門西家文書19）
寛文5年（1665）		湯之奥村の検地がなされる（門西家文書10）
延宝2年（1674）		空役間歩80間切る（門西家文書19）
延宝7年（1679）		検地がなされる（門西家文書10）
貞享3年（1686）	3月12日	品崎半右衛門、門西九兵衛へ雨烟金山奉行衆などの名前を知らせる（門西家文書20）
貞享3年（1686）	7月	茅小屋・内山村で近年は一円金が出ていない（門西家文書19）
元禄4年（1691）	4月	妻子を質にして金を借り間歩を切ろうとする（門西家文書19）
元禄8年（1695）	頃	湯之奥山について湯之奥村では茅小屋分ではないと返答（門西家文書21）
		これより以降金銀など一切でなかったという（門西家文書306・336）

元禄 9 年 (1696)		茅小屋・内山・中山の金堀はこの年までに退転したという (門西家文書370)
元禄14年 (1701)	10月	金山が退転したため茅小屋村の九左衛門は他団に茶商充てていたが生活に詰まつたので、金山に居林を下すように下部村が頼う (門西家文書28)
宝永 2 年 (1705)		湯之奥村の願いにより100日間掘りの内冥加金 1 両 1 分 2 朱宛を市川役所へ上納 (門西家文書10)
宝永 2 年 (1705)		「一、金堀役金の市川内領常葉、但晉小屋・中山三ヶ所、前々金堀共罷在、役金當附に載相動候處、速々通 [] 其程は寺人も不残出候得共、常葉村より永三治文つゝ相納申候」(平岡彦兵衛「宝永二年引渡目録」)
宝永 6 年 (1709)	頃	柳沢吉里が甲斐を知行していたときに、山師たちが見立て間掘りをしたけれども金や銀は一切出なかった (門西家文書306・336)
宝永 7 年 (1710)	12月	甲府代官中井清太夫が江戸から甲州金山見分の命令を受けたという連絡が市川役所に届き、中井清太夫の手代が見分のうえ入山、必要経費等を借りる (門西家文書10)
正徳 1 年 (1711)	8 月中旬	中井清太夫の手代が米は高値なので30日間休むといって道具などを引き取らせたが、市川役所からは何の沙汰もなし (門西家文書10)
正徳 2 年 (1712)	3 月11日	茅小屋での用木取りについて、この山の金堀役金は常葉村の名主が上納していると故障があったが、以来間歩稼は前々の通りとの内済証文が出る (門西家文書42)
享保16年 (1731)	10月15日	江戸の和久屋源左衛門が山々を検分し奥山で銅筋を見付けて穴掘りをする (門西家文書51) 一実際には銅は出なかったようである (門西家文書306・336)
安永 2 年 (1773)	6 月28日	下総国野村文蔵が門西七左衛門に銅山と思われる場所があるので稼ぎたいと申し出る (門西家文書70)
安永 7 年 (1778)	4 月	湯之奥村中山で金山間掘りを100日間掘るように命じられる (門西家文書329)
天明 2 年 (1782)	12月	中井清太夫が甲斐国金山御用掛りに任せられ、御手代古川平五郎・横山直七が山見分を命じる。先手鈴木三十郎という金堀が、この月下旬に入山 (門西家文書79)
天明 3 年 (1783)	8 月中旬	鈴木三十郎下山、諸道具等の代金を払わず (門西家文書79)
天明 4 年 (1784)	2月	金山での損料などを引き受けて、金山開発に取り掛るように求める願書を湯之奥村名主などが堀内糸之丞の御用人中にあてて出す (門西家文書79)
天明 8 年 (1788)	8 月24日	国中金山見分に際しての止宿代について、湯之奥村で請書を出す (門西家文書326)
大明 8 年 (1788)		堀内糸之丞の手先の者が 5 本の間歩を掘る (門西家文書303・357) 一これから寛政 5 年迄見分等は一切無し (門西家文書303)

天明年中		「東川内領戸城村に金山数ヶ所有之、先年は金多く堀出したる處に、或時天人とも云へき化身のもの、右金山真穴の近所に出現せしを、所の獵師鉄炮にて打候へて形消失、獵師も其場に於て死す、夫より何程堀ても金出る事無之由中伝ふ、近年此辺銅山有之、向堀いたす處に銅山に紛無之といへとも、未山師入沙汰無之よし」(『甲陽隨筆』)一記載は黒川・雨畑・保金山などは見えるが、湯之奥金山については触れられていない
寛政5年(1793)	11月	湯之奥村から市川の役所にあて鉱山についての報告書が出される。これによれば数十年来鉱山は稼動していないようである(門西家文書89・90)
寛政5年(1793)	12月9日	湯之奥村から堀内糸之丞の手先の者が掘った間歩について報告書が出る(門西家文書303)
寛政7年(1795)	1月	湯之奥村名主与市兵衛所持の嵐山という刈生畠に銅山の筋が見えるので間掘りをしたいと申し出る(門西家文書308)
寛政8年(1796)	6月16日	堀内糸之丞の手先金堀がやってきて、金山見立て所々の古い坑道を掃除する(門西家文書310)
寛政8年(1796)	8月11日	湯之奥村中尾根権間歩11間1尺5寸掘ったことを届け出る(門西家文書312・313)
寛政10年(1798)	5月	鉱山についての返答書を湯之奥村で出す。これによれば数十年来鉱山は稼動していないようである(門西家文書96)
寛政10年(1798)	6月	湯之奥村では海高山高が無いことを届け出る(門西家文書97)
文化11年(1814)		「柄代山・金山嶺(湯之奥村)常葉山ハ東河内ニ在リ、是レモ連貫ナル一山ナリ」(松平定能『甲斐国志』)
文久1年(1861)	9月	巨摩郡百々の長百姓嘉右衛門等より金山稼の申し出があり。村方は10月に役所にこれを願い出る(門西家文書153)
文久1年(1861)	11月	金山開発に常葉村より支障の旨が申し出され、呼び出される(門西家文書153)
文久2年(1862)	11月13日	金山稼について湯之奥村名主より市川の役所にあてて開発願書が出る(門西家文書153)

(筆者注)

IV 遺構概観

1 平坦面域

平坦面域では、金山沢をはさんだ地域を中心に総数124基のテラスを確認した。テラスは主に標高1405~1500 m付近の沢筋・谷間、または登山道沿いの東西330 m×南北220 mの範囲に散基~10数基が群在・連続して分布するほか、1540~50 m付近の尾根上に1・2基が単独的に存在する例もある。ここでは便宜上、沢と登山道によって平坦面域を5区域に分けて概要を述べたい。

A区は金山沢南側~毛無山登山道北側地域で、計70基のテラスが存在する。そのうち金山沢南岸地域には約25基が連続し、通称精錬場にはA 9・A 20・A 22など、長さ20~29 m程の大型のテラスが並ぶ。精錬場付近は本遺跡中比較的緩やかな傾斜地であるが、その他のテラスはやや急斜面に立地する。精錬場東側の谷間地域には約35基が密集し、本遺跡中最もテラスが密集する地域である。やや急な斜面に、6~10 m程の小規模なテラスが分布する。なおこの谷間地域については、大名屋敷付近のテラス群(E 8~E 17)を含めて1群として捉えるべきであろう。ほかに単独的にA 69が小尾根上に存在する。

B区は金山沢北側~一ノ沢間で、13基が存在する。金山沢沿いでは大型のB 3・B 4を中心に川岸に沿って連続し、山側では小型のテラスが散在する傾向を示す。概して急な立地である。

C区は一ノ沢~二ノ沢間で、9基が存在する。坑道域に続く尾根筋にあたり、二ノ沢沿いの急斜面にテラスが連続する。C 4以外はやや小型である。

D区は二ノ沢~三ノ沢間で、8基が存在する。金山沢沿いの急斜面に小型のテラスが分布する。

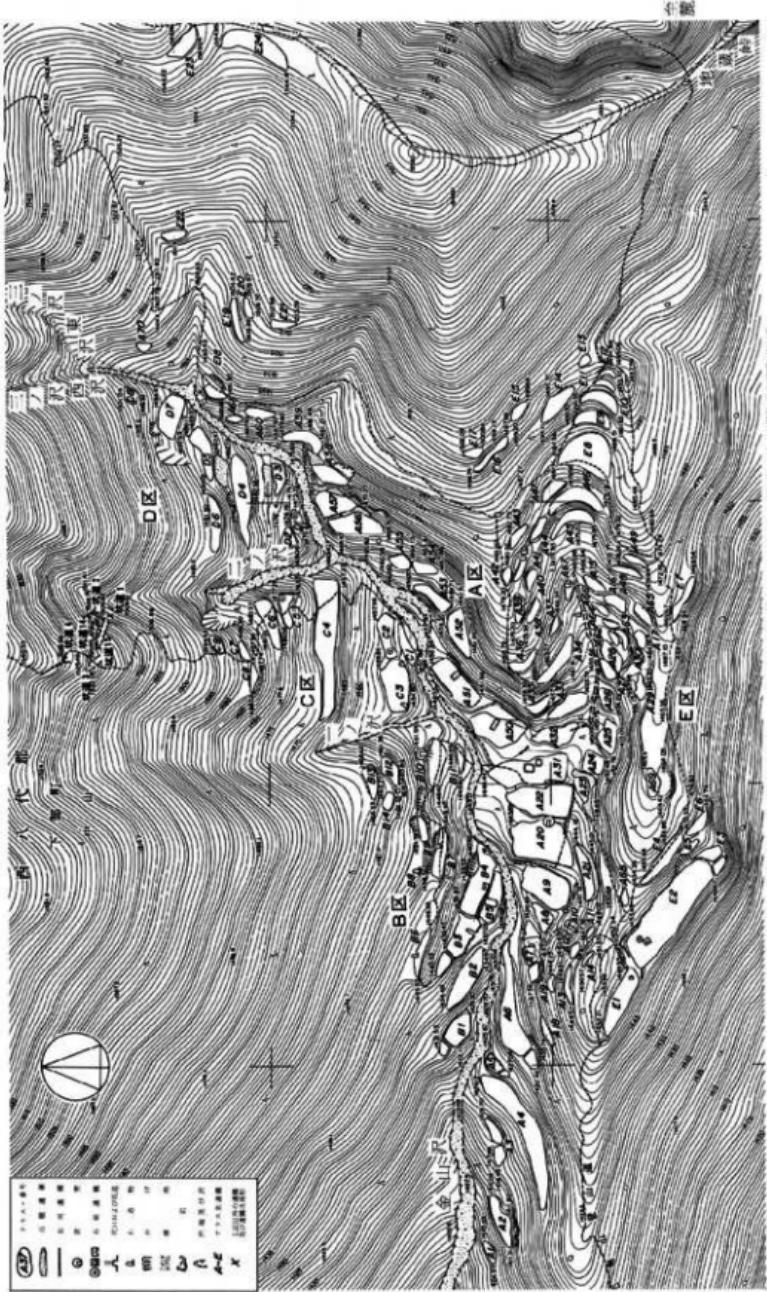
E区は毛無山登山道南側で、24基が存在する。通称女郎屋敷を中心としたテラス群(E 1~E 6)、通称大名屋敷周辺のテラス群(E 8~E 17)が急斜面に立地するほか、地蔵峠周辺の尾根上にE 23・E 24テラスが存在する。E 2は本遺跡中最大で長さ50 mを測るが、その他は小型である。

これらのテラス中には特徴的な構造を示す例がある。テラス面の西端に段構造をもつ例にA 5~7・B 1・B 3があり、金山沢沿いの精錬場西側に集中する。テラス中央付近に長方形の落ち込みをもつ例にA 7・B 5があり、精錬場付近の金山沢両脇に分布する。テラス中央に間仕切り状の石積みをもつ例にA 50・A 51があり、精錬場東側に分布する。以上の諸施設はテラスの機能との関連性を窺わせる。そのほかテラスの築成に石垣を用いる例(A 55・B 3・B 4・E 2)、石積みを用いる例(A 21・A 23など)がある。また炭焼き窯をもつ例(A 20・B 10)、窯状の石組をもつ例(B 4・C 2・C 5・D 1・E 2)があるが、金山操業時以降の構築物も含まれよう。

なお、テラスの性格を知るうえで表探遺物や石造物が手がかりとなる。石臼が認められる例にA 6・A 8・A 9・A 20・A 22・A 32・B 1・B 2・C 3・C 4・D 2がある。磨石が認められる例にA 22・A 23・A 50がある。鉛滓が散布する例にA 20・A 22・C 4・E 2がある。このような粉成・精錬作業に関わる遺物は、金山沢沿いのテラスに分布する傾向がある。また墓石・供養塔関係の石造物が認められる例にA 41・A 67・B 6・B 7・B 8があり、A区大名屋敷付近とB区の上方、七人塚周辺に限られる。

(柳原功一)

至毛無山



中山金山平坦面域全體図 (1/2,000)

A 20・22・23・24等高線図。C 2は西の不透水層、E 8は透水性の岩層については抜かれである。

また一ノ川、二ノ川、三ノ川西界、三ノ川東界、三ノ川北界についても抜かれである。

2 坑道域

金山沢の支沢を便宜的に西から一ノ沢・二ノ沢・三ノ沢と呼称する。テラス群より北にある尾根は東北東-西南西方向にのびる。この尾根を境として北側にはホウキ原と称される浅い谷地形が金山沢に並行して分布する。坑道域は、テラス群よりも上方に位置し、主に尾根の南側斜面地域と尾根向うのホウキ原地域とから構成される。今回の調査では坑道域における遺構の分布を把握することに重点がおかれた。坑道には便宜的に坑道番号1~15をつけ、坑道以外の遺構あるいは人為的と推定される敵地形などについてはX1~77を付した。これらの遺構は、溝状凹地、摺り鉢型凹地、炭窯、石垣遺構、テラスなどからなる。

坑道の分布

中山金山地域の地質は、金山沢に沿って古閏川層の塊状緑色凝灰角礫岩～凝灰岩が主として分布する。金山沢を挟む両側の尾根部にはその上位の塊状泥岩が分布する。またホウキ原より北側には緑色凝灰角礫岩などが広く分布している。全体の構造は、走向が北北西-南南東あるいは北西-南東方向であり、12°~50°南西傾斜である。これに対し坑道内の石英脈あるいは坑道側壁は、走向が北北西-南南東あるいは北西-南東方向を示し地層の走向と調和的であるが、傾斜は約60°~80°北東傾斜と地層に直交している。坑道1、2、3、4、5、6、7、14、15は緑色凝灰角礫岩層中に、坑道8、9、10、11、12、13は泥岩層中に位置している。

坑道は、テラス群からみて北側の斜面のみに分布する。坑道5のように単独である場合もあるが、複数が集合して坑道群を構成する場合が多い。坑道6、7、8を除く坑道は、C1テラス付近を起点として二ノ沢沿いに南側斜面を上って毛無山林道に通じる徒歩道に沿って分布している。なお坑道周辺では脈石英の破片や黄鉄鉱などの鉱物の発達した岩石、あるいはそれらが風化作用によって形成された焼けなどが分布している。

坑道1、2、3、4、14、15

この付近には凝灰角礫岩・角閃石安山岩・玢岩・砂泥岩などが分布する。坑道2、4は北西-南東方向で長さ5~6mであるが、他の坑道は小規模であったりあるいは埋没している。坑道2からは湧水があり坑道の奥は水没している。

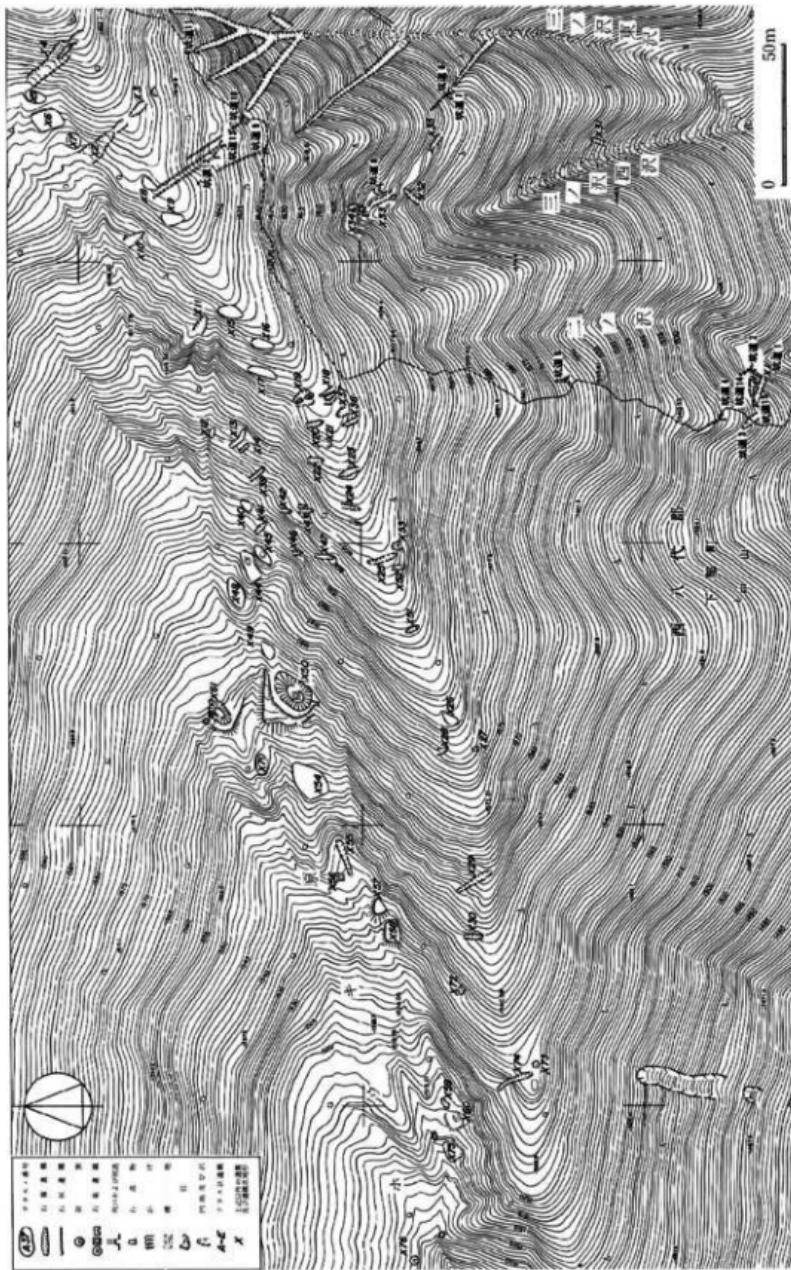
坑道5：極粗粒砂岩～細礫岩からなる。ほぼ南北方向で約3.4mの長さを持つ。入り口はやや埋没している。

坑道6、7、8

緑色凝灰岩～凝灰角礫岩が分布する。坑道6、7は水平坑で西側坑道壁に胚胎する同一石英脈を上下で追跡している。坑道6の長さが10m以上だが、坑道7は1mである。坑道8は、高さ約4.7mの立坑の底部に北西方向の斜坑が存在する。立坑を構成する直立した側壁はわれ日が発達しており崩壊しやすく危険である。

坑道9、10、11、12、13

このうち坑道11は長さ3.1mと小規模で分布もやや離れている。坑道9、10、12、13は、全長23.5~26.6mと中山金山遺跡中で最大規模の水平坑であり、ここに集中的に分布している。しかしこれらの坑道は、北西-南東方向で高角度で東傾斜した側壁面を有し、坑道西側の壁面に沿っ



中山金山坑道域全体図 (1/2,000)

て石英脈が認められる。基盤は暗紫～暗灰色シルト岩からなる。坑道9は、坑道中央に方形の掘込みがある。坑道12は、上下に枝分かれしている。坑道13は上下に枝分かれし、下の坑道先端は水没しており、また上の坑道はさらに上方に分岐している。

溝状凹地地形

尾根とホウキ原にそった北側斜面、および坑道周辺特に谷側などには、溝状凹地が分布している傾向がある。凹地内には、黄鉄鉱を含む赤褐色岩石、珪化した岩石、脈石英などが転石として存在する。X18、34では石英脈が露出しており、X34では幅約50～60cmの間に石英脈群が存在する。凹地の方向は北西～南東方向であり坑道の走向傾斜方向と調和的である。溝状凹地X2、3は、坑道11の延長方向にはほぼ同一の方向性をもって存在している。坑道11、14、15などは溝状凹地の一部に坑道が位置しているとみなせる。X35は坑道6、8の間に位置している。X33は坑道8に接してかつ同一の方向性をもつ。X32は一般的な坑道の方向に直交方向を示す。これらの地形の大きさは幅1～数m、長さ数～10m以上に達する。以上のように坑道と溝状凹地とは密接な関連性をもって分布している。地元下部町在住でこの付近の川底に詳しい佐野友一氏は、試し掘り跡ではないかとしている。実際X2、4、18、19などは試掘坑的な性格がかなり強いと推定される。詳細については今後の調査を待ちたい。

摺り鉢型凹地

X50はホウキ原の中央を流れる流路に沿って山側斜面と流路側に張りだした土壘状の高まりによってとり囲まれた摺り鉢状の凹地である。大きさは直径約10m、深さ2～2.5mである。さらに凹地底部には 1.5×0.6 m、深さ30cm以上の方形石組が存在する。凹地南西部には、 1.7×0.6 mのL型石垣遺構が存在する。この凹地は遺構と考えられるが性格については不明である。

炭窯

ホウキ原の下流側に炭窯X76が存在する。内径約2m、高さ約1mの上方に開いた円～横円形の石組遺構である。中央部は埋没しているが、石組の保存状態は良好である。

石垣遺構

X56は、ホウキ原の流路と溝状凹地X55との合流部に位置する。塊状の凝灰角礫岩の謀頭に接するように2ヶ所に長さ約1.5mほどの石垣遺構が2mの間隔で向かい合っている。両者は弧状に連続する可能性もあるが、詳細は不明である。

平坦面

ホウキ原の流路沿いおよび尾根沿いに長径5～15mの小規模な平坦面が点在する。今までの調査ではどの平坦面からも遺物の検出はない。しかし、X48の地表面には石英脈の破片が多く転石として検出されている。

今後の調査の方針

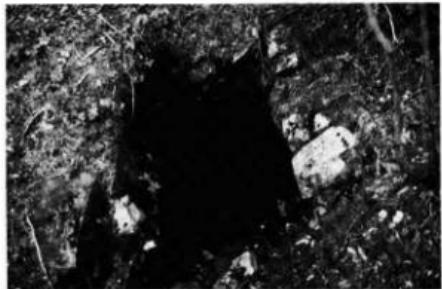
第2次調査では坑道等の遺構分布をあきらかにできた。しかし遺構の性格が不明なものが坑道域においては少なくない。今後、詳細な調査が望まれよう。また本遺跡の広がりを把握するため周辺地域とともに毛無山登山道沿いの地域について分布調査も継続する必要があろう。

(河西 学)

V 坑道調査所見

現在、開口部を持つ坑道は、13ヶ所確認されているが、これらはみな標高1506mから1638mの間に展開している。調査団は、坑道所在区域と坑道の区分のために二ノ沢・三ノ沢西沢・三ノ沢東沢のブロック名をつけ、さらに個々の坑道には1号から13号の番号をついている。この区分に従えば、1号から4号は標高1506mから1529mの二ノ沢の中腹に、5号は二ノ沢のつまりの標高1565mの尾根近くに、8号は標高1588mの三ノ沢西沢中腹に、6号・7号は三ノ沢東沢の標高1569mから1571mに、9号から13号は標高1629mから1638mまでの三ノ沢東沢の上流から尾根近くまでに分布している。今回の坑道内部への立入り調査の最大の課題は、一つには坑道の採掘法から稼働時期の上限を知ることができないかという点である。もう一つは、坑内からどんな鉱物が採掘されていたのかを明らかにすることであった。

坑道掘りには、錘押し掘りといつて鉱脈に沿って掘り進む方法と、横相（合）といって鉱脈の走向を予測して鉱脈に直角に切り当てる方法がある。横相は高度の測量技術を伴うことから、錘押し掘りより新しい技術と考えられている。横相が文書の上で確認できる最も古い例は、石見銀山の慶長5年の文書である。佐渡の銀山では、慶長10年からの文書に頻繁に現れてくる。もっとも、後世になどても小規模銀山における手掘りの坑道では錘押し掘りが多かったので、錘押し掘りだから古いと断言は出来ない。しかし、他の条件を考え併せて採掘の新旧を考察する目安にすることは出来るといえよう。そうした意味から今回確認された坑道中、7号と12号の坑道内部において西壁に沿って石英脈群が存在することは重要である。1号から13号までの坑道は、ほぼ同時期に稼がれたものが多いと考えられることから、おそらく錘押し掘りが主流であったのではないかと考えられる。次に問題となるのは、坑道の架枠（加背）の規模である。架枠とは、坑道の高さと横幅のことである。文化13年の「石見國銀山旧記」では、化粧棚をもつ中心坑道の堅横は六尺（182cm）×五尺（152cm）。寸法切は、堅横四尺（121cm）×二尺（61cm）。永久坑の大水抜きは、堅横五尺×三尺（91cm）である。ほぼ同時期の「佐渡銀山記」には、大間切堅一丈二尺（364cm）から一丈（303cm）×横八尺（242cm）から七尺（212cm）。中間切堅七尺から六尺×横五尺から四尺。小間切堅五尺から四尺×横三尺。同丸切り堅四尺から三尺×横三尺とある。上記は、江戸



坑道

時代の架枠の一般的な事例であるが、戦国期から近世初頭の架枠は共通して堅に対し横幅が狭いという特徴がある。今回の坑内の実測で特に目を引いたのは、9号と12号である。9号の坑口の計測値は、堅75cm×横135cmであるが、これは坑口を完全に発掘しないままの数値であるから坑道の新旧を識別するには無意味である。内部においては、堅145cm×横80cmと堅170cm×横30cmが実測できた。特に後

者は、近世初頭から戦国期に遡る可能性大といえる架枠の数値である。12号の坑口の計測値は、豊横90cm×80cmであるが、実態は9号の坑口の数値と同様である。坑内の実測値は、坑口から坑道分岐点（三つ合）までの架枠は、豊横120cm×80cm。その奥へ分岐した上部の坑道の豊横は120cm×60cmである。また、下部に延びた坑内の豊横の架枠では140cm×50cmと、150cm×50cmと、100cm×50cmを実測できた。以上の通り、9号と12号の内部では、豊横が2：1の比率を遙かに上回っていることを指摘できる。慶長3年の伏見御藏納日録に出る越後黄金山の主体である高根金山（鳴海金山）も、後世の再開発の影響で当初の架枠を確認するのは困難であるが、7号の豊横120cm×40cmや8号の豊横140cm×64cmなどは、近世初頭から戦国期の稼行を語る数値といえる。なお、伊豆の縄地金山の運上山の山腹には、八貫間歩（坑道）があるが、これを掘った山主（山師）の八貫（八官）は、大久保長安の父親であるという面白い伝えが地元にある。享保20年の「目安したため書」によれば、慶長10年に中山の六間歩を請け負った越後庄三郎・運上山十一間歩を請け負った出雲五左衛門と一緒に、八貫助九郎が豊岩六間歩を請け負っている。八貫が大久保長安の父であるかどうかは別として、八貫間歩の実測値に注目しよう。坑口の豊横130cm×160cm、この架枠が50m奥へ続き、ここで豊横120cm×80cmとなり、さらに80cm入った地点で豊90cmに対し横幅40cmになっている。地元の伝えでは、これは勘助掘りという甲州流の採鉱法で、伊豆には甲州流が多いと聞いていることである。さらに、伊豆の爪生野金山（大仁金山）には、家康が小判の地金を掘り出したという初期の坑道が残っているが、これも縱長の坑道であることを付記したい。なお、初期の坑道は、天井が方形か馬蹄形のものが多いのも特徴といえる。

次に、茅小屋金山・内山金山・中山金山を総称して湯之奥金山と称しているが、はたして金が出たのかどうかは関心の高まるところである。もしも、金や銀が産出したことが判明すれば、ここが元亀2年深沢城攻めで活躍した中山之金山衆十人の稼ぎ場であった可能性が高まることになる。そんな観点から、鳴海金山での体験を活かして12号坑道の奥壁で石英脈に沿った粘土や鉱砂を採取した。これをキャンプ地の水飲み場にしている金山沢の水溜めで、汰盆で比重選鉱した結果、木綿針の頭の三分の一程度の金粒が四粒採れた。さらに翌日は、この金山沢の川床を掘って簡単な砂金流し同様にして比重選鉱したら七粒の砂金を採取できた。金粒自身は前日同様微小な物であったが、短時間で、しかも簡単な方法で採取できたことを考えると、この程度の量であっても過小評価はできないと思われる。いずれにしても、中山金山が初期の黄金山であったことが証明できたことの意義は大きいといえる。

今後の問題点としては、初期の黄金山の生産技術と、近世前期の技術の違いを如何に明確化できるかということがある。採鉱技術・精錬技術に、違いがあったのかなかったのか。また、いずれの坑道も奥行きが短いのであるが、鉱床規模との関連でどのように評価するべきかこれも検討課題といえる。未発見の坑道集中地城がどこか近くにないのであろうか、大規模な砂金掘場の存在を検討することと共に、以上の諸点が今後の重要な課題であるといえる。

（小脇徹也）

VI 第2次考古学調査の概要

1 遺構と遺物

A-33テラス

A-33テラスは、中山金山の中心をなすと思われるA-20・21・22号テラスから東へ延びる谷の北側、西向きの急斜面を作り出してテラスとしており、標高1453m付近に位置している。

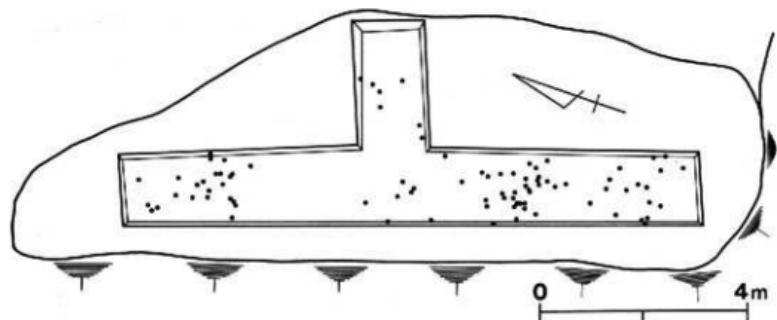
テラスは東側の立ち上がりが埋没しており、現状では明瞭でないものの、平坦面が広く残され比較的遺存状態は良好であった。調査はテラス中央を中心 $11.3 \times 1.5\text{ m}$ 、 $2.5 \times 1.4\text{ m}$ のトレンチをT字型に設定し、掘り下げを行った。

テラスには腐食土が堆積しているのみで、約5cm掘り下げるところ陶磁器、青銅製品等の遺物が多数出土した。地表から7cmほど掘り下げるところ黄褐色の地山が確認され、精査を行って建物等の遺構に伴う痕跡の検出を行ったが、なんら確認されなかった。



A-33 テラストレンチ近景（南から）

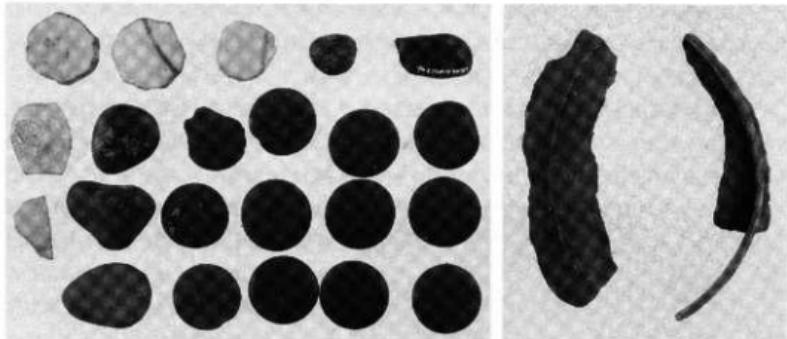
出土遺物としては、テラス南側に陶磁器類および石臼片、鉛錠が集中して出土し、墓石、青銅製品としては古錢（寛永通宝）、小柄、密教法具の六器の台皿と推定されるものが北側を中心に出土している。墓石は白・黒合わせて20点が確認されているが、黒はすべて石製品であるが、白はすべて磁器の破片を丸く研磨し転用している。また、密教法具の六器の台皿は小破片であり口縁部を欠くが底部と受け部はしっかりと残っている。



A-33 テラス平面図（ドットは遺物を示す）

調査によって遺構の検出はできなかったものの、削り出した立ち上がり部に石積み等は持たずテラスを構築しており、南北14.5m、東西4.8mを測ることが確認された。また、出土した陶磁器類から17世紀後半でを中心としてテラスが使用されたと考えられる。遺物として遊戯具である碁石が出土したことは非常に興味深いことであり、小柄、密教法具の六器の台皿が出土したことから、生活の場としての性格付けと共に、居住者の地位的な位置付けもある程度限定されよう。

(宮澤公雄)



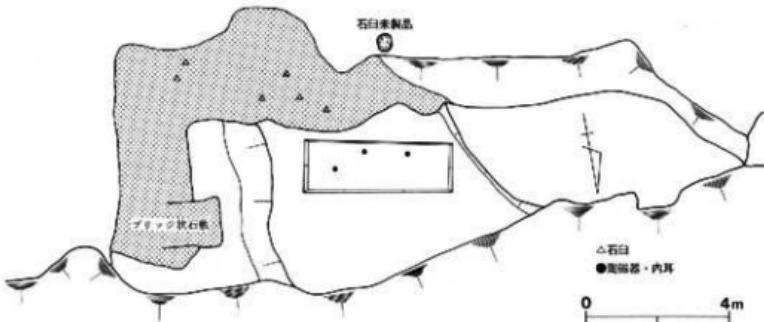
A-33 テラス出土遺物（碁石、台皿）

A-7 テラス

A-7 テラスは金山沢左岸、本遺跡テラス群において西端を形成する群中のひとつであり、E-1・2（通称女郎屋敷）とは林道の尾根を挟んで北側に位置している。

テラスは北面急傾斜を削り出して構築しており、斜面側には石積みがなされている。石積みは崩落が激しく本来の状態を保っている箇所はほとんど見られない。

石積みの用材の中には石臼が数点確認されているが、その中には石臼の未製品も1点確認され



A-7 テラス平面図



A-7 テラス石積み検出状況



A-10 テラス出土石臼未製品出土状況

ている（A-10テラス等でも確認されている）。

調査は石積みの清掃およびテラス中央に 4.1×1.5 m のトレンチを設定し、掘り下げを行った。

トレンチ内からは遺物がほとんど出土せず陶磁器片が数点出土したにすぎなかった。しかしながら、陶磁器とともに日常生活雑器である内耳土器が底部のみの小破片ではあるが出土したことは第1次調査からの課題であり、意義深いものがあろう。

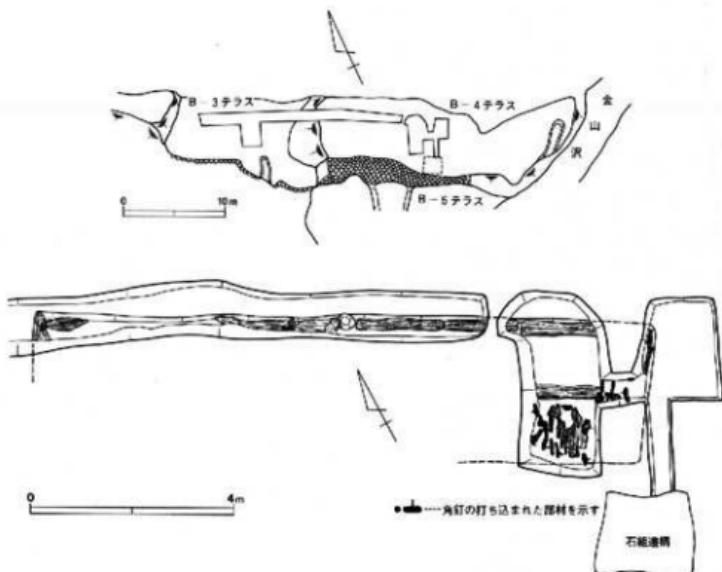
テラスのはば中央付近を南北に岩盤の露出した部分が見られ、テラスを二分している。また、東側には礫が幅1.2 mほど敷かれたような状態で確認され、東側よりテラスへ通じるブリッジ状の施設かとも考えられるが、テラスの構築時期と同時期かどうかの断定はできない。

（宮澤）

B-3・4 テラス

B-3・4 テラスは金山沢右岸の標高1439 m 前後に位置し、対岸の南側にはA-8・9 テラス等が存在する。両テラスは一見すると一つのテラスとして捉えられそうであったが、中央部付近に段差が存在したためにあえて二つに分けた。B-3 テラスは東西幅約20 m、南北幅約8 m を測り、西側には10~15 cmのレベル差をもつ段差が存在し、南東側の縁辺には東西約1.0 m、南北2.5 m を測る溝状の凹地が存在する。また南側斜面には約17 m にわたって石垣が認められる。テラスの調査は1.2 m×20 m のトレンチをB-4 テラスにまたがるように東西に設定し、遺構確認を行った。その結果、現表下約10 cmで地山面と思われる黄褐色土層が認められ、この上面で精査を行ったが遺構と思われるような落ち込み等は確認されなかつた。さらに一部南側にもトレンチの拡張を行ったが、検出された遺構はない。出土遺物もほとんどなく、鉄製丸釘及び陶磁器の細片がわずかに出土しているのみである。なお表採ではあるが石皿タイプの石臼が1点出土している。

B-3 テラスの東側に続くB-4 テラスは、東西幅約25 m、南北幅約7 m を測り、B-3 テラスと同様にテラス南東側の縁辺には、東西約1 m、南北4 m を測る溝状の凹地が存在し、南側斜面には約15 m にわたって石垣が認められる。また、本テラスの確認段階でテラス南縁の中央部にカマド状の石組遺構が確認されており、それらの性格・時期等も含めテラスの調査にあつた。前述したB-3 テラスと本テラスにまたがるトレンチおよび石組遺構北側部分に接するように4 m×5 m のトレンチを設定し遺構確認を行ったところ、現表下約10~20 cmで黄褐色砂層が認めら

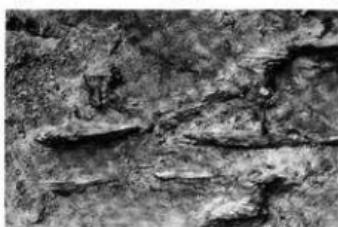


B-3・4テラストレンチ配置図及びB-4テラス木組遺構平面図

れ、約15~20cmの堆積が認められている。本層準はおそらく金山沢の洪水砂と思われる。その下層には地山面と思われる黄褐色土層が認められている。

石組遺構は、黄褐色砂層上面に構築されていることが確認され、遺構内部からはガラス瓶や鉄製丸釘等が出土していることからかなり新しい時期の所産ではないかと推測していたが、同遺構についてこの土地に詳しい地元の方に話を聞いたところ、昭和20年代に山仕事に入った人々によって築かれた風呂釜であるという情報を得て、金山操業時に関わるものでないことが判明した。

一方、黄褐色砂層下からは地山面を切り込んで木組遺構が検出されている。本遺構は東西12.35m、南北2.65mを測り、



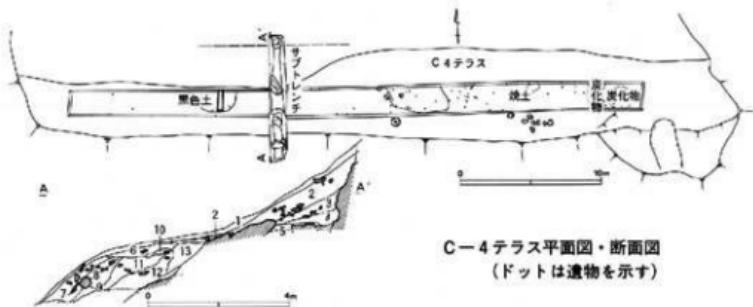
B-4テラス木組遺構検出状況（西から）及び角釘付部材出土状況

東西に細長い長方形を呈するものと思われ、厚さ約8cm前後、長さ約170cm前後の板材をいくつか配している。各材には柱等の部材を接合したようなねぞ穴は確認されていない。こうした木組に伴い鉄製角釘が打ち込まれた部材の断片が多數出土しており、部材の接合に使用されたものだろう。その他、本遺構に伴う遺物としては、時期不明の陶磁器細片がみられるのみである。また、本遺構の性格として現段階では、金山に直接関わるものかは不明であるが、何らかの建物跡もしくは施設跡と想定することができるが、その年代については不明と言わざるをえない。（平野 修）

C-4テラス

本テラスは金山沢北側、一ノ沢と二ノ沢間のC区3段目に位置し、標高1469mを測る。東西方向52m、南北方向6.5mの規模で、本遺構で最も長いテラスのひとつである。テラス中央には完成の上白が露呈し、テラス東側には8点の石臼片が集められていたほか、少量の鉛洋が散布しており、当初、粉成から精錬を行った作業地区と想定した。

調査は、41m×2mのトレンチ1本を入れて遺構確認面まで下げたほか、南北方向に9m×



C-4テラス平面図・断面図
(ドットは遺物を示す)



C-4テラストレンチ全景（西から）

1.2mのサブトレレンチを設定し、テラスの幅や築成方法を確認した。

土層は、地表より表土・褐色土・細繊を多く含む黄褐色土で、遺物包含層は厚さ約10cmの1・2層である。サブトレレンチで断面を観察したところ、テラスの幅は6.5mで、南側半分は山側（北側）の切り土で盛り土し、裾部には90cm大の礎で土留をしていることが判明した。明確な遺構はなかったが、トレンチ東端では表土直下に薄い炭化層と焼土層を検出した。

トレンチ中央と西側で浅い落ち込みを確

認し部分的に下がたが、風倒木痕の可能性が高い。

遺物は、常滑指鉢・天目茶碗・志野・染付などの陶磁器片、鉄鏡1、鉄製角釘のほか、径数cmほどの小さな鉱滓・鉱石が、主にトレンチ東側でやや多く出土した。石臼は、調査前に確認した資料と合わせて上臼4、下臼5（うち3点は完形）、石皿タイプ2、殻臼1で、鉱滓・鉱石の分布と重なる。また、青黒色の碁石状自然石が2点出土している。

調査の結果、建物の柱穴や炉などの遺構は検出できなかったが、鉱滓・鉱石・石臼が出土し、居住地というより粉成・精錬に関わる作業場所であった可能性が高い。石臼による粉成作業には水が不可欠であるが、木テラスは金山沢より高所にあり水の便が悪い。本テラスで粉成作業を行う場合、二ノ沢からの引水を想定できよう。

（植原）

E-2 テラス

本テラスは中山金山のテラスのなかでも最大規模を誇り、標高1450m前後に位置している。昨年の第1次調査ではJ区女郎屋敷跡として一部トレンチ調査を行っており、本テラスの概要については第1次調査概報を参照されたい。第2次調査では昨年調査を行った第1トレンチに直交するように規模 1.2×17.2 mの第2トレンチを東西に設定し、さらにE-1テラスとまたがるように規模 1.1×16 mの第3トレンチを東西に設定し、昨年に引き続き遺構確認を目的とした調査を行った。その結果、第2トレンチでは現表下約20cmで黄褐色土層が認められ、精査の結果、建物址等の遺構は検出されなかったが、東端部では溝状の落ち込みが存在し、その内部には多量の拳大～人頭大の礫が人為的に投棄された状態で認められており、同テラスの造成に係わって埋められたのかもしれない。出土遺物としては18世紀代を中心とする陶磁器片数点と性格不明の鉄製品、鉱滓があるが、その量は極めて少ない。

第3トレンチ内でも建物址等の遺構は検出されなかったが、トレンチ東側部分では表土層直下から時期不明の陶磁器片とともに、鉱滓と鉱石が比較的まとまって出土したことから、精錬施設の存在が期待されたがトレンチ内では検出されなかった。しかし、同トレンチ外の北側には礫の散布が比較的まとまった状態で認められ、それらが精錬作業に関わる施設となる可能性が考えられたため、同箇所の清掃及び精査を行った。その結果、時期等は不明であるが、カマド状とドーナツ状を呈した2基の石組遺構が確認され、カマド状を呈する石組遺構は長径約2mを測り、遺構内からは板鉄状の鉄製品、鉄製丸釘、羽口片等が出土している。

ドーナツ状を呈する石組遺構は長径約2mを測り、石組内、遺構周辺から上臼片や羽口片等が出土しているものの、精錬に伴う鉱滓や焼土、灰等の出土は全く認められていない。两者とも一部出土遺物から精錬施設の可能性はあるものの、その年代については不明な点が多く、現段

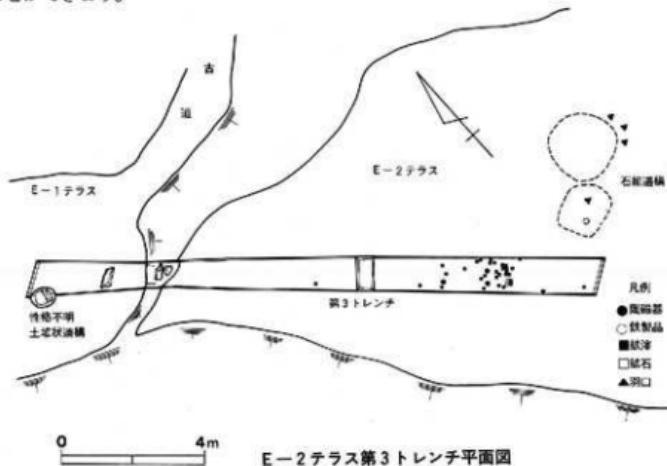


E-2 テラストレンチ全景（南東から）

階では金山操業時の施設であるとは明言できない。

同テラスでは主に建物址等の生活関連施設及び生活用品の検出が期待されたが、そのような期待とは裏腹に精鍊に関わる遺物が多量に出土したことは、テラス使用目的の多様性の一端を窺い知ることができよう。

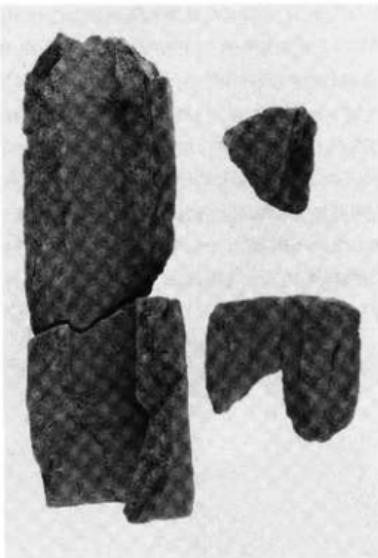
(平野)



E-2 テラス第3トレンチ平面図



E-2 テラスドーナツ状石組遺構（上・下とも）



石組遺構周辺出土羽口

調査の成果

第2次調査では、A区でA-7、A-33テラス、A-34テラス、A-50テラス、B区でB-3・4テラス、C区でC-4テラス、E区ではE-2テラスをトレンチによる発掘調査をおこない、既に述べてきたような成果をあげることができた。その中で特徴的なテラスの遺構について整理し、まとめにしたいと思う。

まず、C-4テラスでは、焼土遺構と石臼、大量の鉛滓が出土した。ここでは粉成と精錬作業がおこなわれた可能性が高い。このような作業は、第1次調査のA-32テラスの円丘状のマウンドとなる焼土遺構とやや共通するもので、C-3、A-6テラスも同様の性格である可能性がある。焼土遺構は、小規模な精錬炉の可能性も否定できず、「鼓銅図録」「佐渡金山船巻」でみられる径2尺以内の精錬炉と共通する部分もある。

E-2テラスでは、石臼とカマド状石組、羽口（土製送風管）、金はし、焼土が出土している。羽口と焼土の存在は、精錬もしくは鍛冶用の高熱を要する炉を示している。金はしは「鼓銅図録」「佐渡金山船巻」にみられる鉛山T具にも類似する。本テラスは、女郎屋敷跡と伝承されている本金山遺跡で最大規模のテラスであるが、遊女・女性の居住域と結びつく物証は現在のところ発見されておらず、選鉱・精錬等の作業域と居住域である可能性がさらに強まっている。

B-4テラスでは、石積みに沿って3ヶ所の落ち込み、大規模な木組みの遺構を検出した。木組みの遺構は、角材と板壁による建物址の一部とみることができるが、一方では選鉱作業場の施設の可能性も考えられる。前者の場合には相当規模の大きな建物を想定でき、後者の場合は、金山沢の上の方から分水して小さな堀割を本テラスに引き込み、木樋があり、そこからB-5テラス側へ直角に汰り板を置く斜めの堀が置かれていたのであり、角材は木樋の縁材、板材は樋の底板を考えたい。それゆえ、板材が厚く、板材の接合面には角釘の合わせ釘（両端が尖る釘）を打ち込んで水が漏れないようにぴったり接合する丁寧な構造になっているのかも知れない。そして、B-5テラスの落ち込み（約3m×5m、深さ1m）は選鉱でゆりわけられた水を貯めておく金池の可能性もある。このような方形の池の類例は、島根県吉田町菅谷たたらで、火だらからからの鉄分の多い排水を貯めておく金池として遺存しており、島根県大田市石見銀山遺跡（中世～江戸初期とみられる石見銀山山上の遺構群）のなかに径5～8mの方形の落ち込みがあり、鉄や銅・銀の精錬にも同じような施設が伴うことを実見した。また、石臼半製品を出土したA-10テラスは、現地に同石質の閃綠岩の岩盤があることから、近世における石臼の加工場か生産場とみることもできる。

このように、施設の性格が推定できるテラスがあるが、A区・B区・C区のテラスのうち、かなりのものに共通の形態があることが知られた。すなわち、細長いテラスの一端に落ち込みと石組があり、一段高くなっているという形態である。この形態のテラスは、兵庫県猪名川町多田銀銅山遺跡の室町～江戸期のテラスにも類似した例があり、鉛山の精錬・居住作業に固有の施設のようである。推定すれば、石組は居住用の小屋に伴うカマド、落ち込みは選鉱に伴う桶や池等の施設とみれるだろうか。

このように第2次調査では、金山沢周辺のテラスを総数124とほぼ把握できたこと、また各テラスの性格や機能がだいに明らかにされつつあることなど大きな成果があった。（十菱駿武）

2 出土した陶磁器

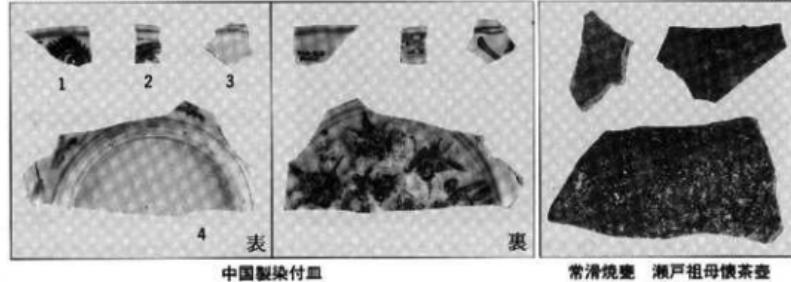
第2次調査によって採集された陶磁器は、約90点であり少ない。時代的には、17世紀以降、18、19世紀のものが主である。多くは瀬戸美濃製品であり、これに肥前系の磁器類が少量ある。また、出土状況をみると、いずれも破片が散漫で、遺構から遊離した2次的なあり方を示しており、本来の使用状況や組成とは考えられない。これは、第1次調査での指摘と同様である。

第2次調査の出土陶磁器の問題で、特筆されることは、確実に戦国期にのぼる陶磁器が採集されたことであろう。左下の写真は、中国製の染付皿で、1、2、3はA-20、C-4、A-22テラス出土、4はA-23テラス斜面からの表面採集品である。1は略化された牡丹唐草、2は松竹梅の一部と内面には四方擇が描かれる。3点とも口縁が内溝する皿で、主として16世紀の後半に使われたものである。4は、外に牡丹唐草、見込みは高欄に花文を描く端反り皿で、16世紀の前半に多く使われた。右下の写真は、これらの染付と同様、16世紀のものと推定される常滑焼の壺と瀬戸の祖母懐の茶壺の破片である。

このうち、食器としての染付は一般的な集落でもごく普通に大量消費されたものであり、戦国期を特徴づける陶磁器である。また、この地域を含む東日本では、貯蔵具としての大甕も常滑焼が流通していた。さらに染付と共に、瀬戸美濃焼の灰釉の皿や天目茶碗、塗り鉄の擂鉢等も共存するのが通常であるが、この調査で採集されていないのは、先述のように遺構に伴った本末のあり方をしていないためと思われる。一方、祖母懐の茶壺は、茶道具として機能の限定された陶器である。染付等の日常用具に対し、流通量も少ないもので、用途からも茶の湯が行われるような階層の存在が暗示される。第1次の織部の向付とともに、戦国から近世のはじめにかけて、この山上にそうした階層の生活があったこととなり、金山経営の具体像を考える上で興味深い。

この状況を先行する業績である甲斐の黒川金山と比較してみる。まず黒川ではD地点に顕著なように掘立柱建物の遺構に伴い、戦国期の遺物が確認される。陶磁器は、中国陶磁、瀬戸美濃、在地のかわらけと内耳鍋等、一般的な城館や集落の陶磁器と同じ構成である。陶磁器の時期では、16世紀の前半のものが多いとされる(黒川金山遺跡研究会1988「甲斐・黒川金山第2次調査報告」)。ただ瀬戸美濃の製品に線釉の灰釉皿があり、その通常の使用年代は15世紀の中葉以前と考えるので、黒川金山は15世紀の前半までのぼる可能性をもち、現時点の結果では中山よりも先行していると言えよう。しかし、資料の少ない今は、両金山とも戦国期には開発されていたことを確認するにとどめておきたい。

(小野正敏)



中国製染付皿

VII 第2次民俗調査の概要

平成2年度、湯之奥金山を中心とする下部町域の民俗部門調査について若干の報告をする。今年度は、中山金山、内山金山に関する社会組織の解明に向けての調査、口承文芸の聞き取り等を実施した。金山の社会組織については、「金山下り」の伝承を手がかりとして、金山での遺習が残存するものかどうか、またそれ以降の変遷を含めて、おもに常葉区の竹之島、境畠等において調査を行った。その調査については、本報告で詳細に記したい。とりあえず、ここでは湯之奥地区における親分子分慣行と口承文芸の概観にとどめたい。

1 湯之奥村の親分子分慣行

300年以上の湯之奥金山と湯之奥村の関係を、現時点で知るうえで、その痕跡がいかほど残っているかを調べることは難しい作業である。例えば、湯之奥村が、金山によって開かれた、ないしは金山と密接な関連をもっていた集落であるとしたならば、金山集落特有な習俗のいくつかが、今日においても残っていてしかるべきかもしれない。何がそれなのか、現時点で詳らかにはできないが、社会組織等に何らかの痕跡を残していることは十分に予測できる事柄である。

今回のレポートは、湯之奥村の社会組織の一部を報告することを通して、金山特有の現象が存在するのかどうかを明らかにすることに、その目的をもっている。しかしながら何が金山特有の事柄であるのか断定するためには、鉱山に関連した他地域の集落との比較が必須であろうし、また下部町の他の村々との比較を抜きに語るわけにはいくまい。その比較検討は、湯之奥金山の総合調査の最終結果をみないかぎり、出来ないわけであるが、今回は民俗上変化・変遷の比較的少ないと思われ、過去の民俗をより多く残しているといわれている親分子分慣行をとりあげ、その参考の一助にしたい。

親分子分慣行は、甲州の最も顕著な民俗の一つにあげられる。服部治則氏によって武田時代の寄り親制度の残存であるという指摘がなされているように、近世・近代においてもなかなか消滅しなかった慣行である。それゆえ、湯之奥村における親分子分慣行は金山当時の社会組織を知るうえで何らかの手掛かりになるはずである。

今日の学説に従えば親分子分慣行は、二つの類型によって理解されている。一つが親分が一極に集中する大垣外型、もう一つが親分が分散する上湯島型である。大垣外型は家格がヒエラルヒーに存在する村に、上湯島型は経済・社会的格差の余りない村に行われている慣行であると、一般的には説明されている。湯之奥村は後者の形態で、親分を頼む筋筋は一定せず、分散している形態で、家格差がない村の範疇に入ることになる。

湯之奥村でオオヤと称せられ、湯之奥金山と深い関わりを持っているといわれる門西家の親分子分関係は、現当主の先代が昭和11年に結婚したおりには、オヤブンはオオヤの分家であるニイヤで、オセワニン（仲人）は下部の「源泉館」であった。その先代も「源泉館」が、オセワニンをしており、代々この家に頼んでいたという。オヤブンは、もう一つの分家であるニイヤに頼むこともあるというので一定していない。オオヤの分家であるウエでは、オヤブンをジルイのニイ

ヤに、オセワニンをジルイ外のシタに頼んでいる（シタのオヤブンはウエなので相互に取り合っていることになる）。門西ジルイと家系において匹敵するようにいわれている望月ジルイでは、本家であるノボリは、オヤブンをジルイ内部のクラから、オセワニンをやはりジルイ内部のクダリから取っている。このように、オヤブンは一つの家に集中することではなく、また代々同じ家筋に頼むことは稀であるといわざるをえない。

湯之奥村が、門西家によって拓かれた村で、その門西家が秀でた経済力と社会的地位をもった、近隣に知れ渡った名望家であったとするならば、通常はオオヤにオヤブンが集中してしかるべきである。それが現在においては、ほとんどコブンをもたないということは、一般的にはその経済的・社会的地位の低下にその原因を見ることができよう。しかしながら、伝承できかねることができる大正期においても、オオヤにオヤブンを頼んでいる例はジルイ外のワデを除いては見当たらないようである。ということは、親分子分慣行が早い時期で変容したのか、当初からオオヤに匹敵した家筋が存在し、互いに協力しながらムラを切り拓いていたかである。

後者であるならば、親分子分慣行が柳田国男がいうように、労働団組織にその起源をもつならば、湯之奥村における労働団の頭目と称されるオヤは数人いたということになる。ということは、門西家が湯之奥村で長い期間にわたって卓越した家で、村全体を統括していた根拠は、この親分子分慣行からは出てこないことになる。

不幸が出たとき、葬儀はムラ全体で行うが、そのおりに中心をなすのは親類であり、村を取り仕切る絶対的な権威をもつ家筋は今日見当たらない。区長にしても持ち回り制である。また、共同作業であるテマッカリ（ユイ組織）は、オヤブン・コブン、ジルイ、シンルイ関係でなく、暇で都合のよい人に頼むようである。このことからも湯之奥村には、家格の厳格な階層性が存在しない観がある。

これが何によるのか。金山当初の村のあり方を示すものか、さもなくば急激な変化の結果なのかは、調査の現時点では断定しにくい。激変の結果であるとするならば、金山当初の社会組織の特色を浮き彫りにすることは、伝承資料からは難しいといわざるをえないであろう。だが、変質をもたらした社会的・経済的要因が何であったかを究明することはできるはずである。

2 口承文芸

金山に関する口承文芸調査は伝説を中心に進めた。今回の調査データに加え、既出資料の整理を試みたい。下部町内の伝説を一覧表にすると表1のようになる。これは『下部町誌』「口碑・伝説」の項に記載された例話をもとに、そ



中山方面の山

表1 下部町伝説分類一覧

分類	番号	題名	主人公	場所	著者・出典	備考
木	(木) 1	桃敷松	桃の大家小松丸	馬場平	下部町誌	
	2	豆まき桜	源氏の落武者	道村門尾	タ	
	3	乳の木さま	日有上人	杉山	タ	
石	(石) 4	牛石	武田信玄	湯之奥金山	タ	湯之奥金山の伝説
	5	犬石	古賀の地区若狭之助	本栖湖	タ	
	(岩) 6	お春岩	川向の名主の娘お春	川向部落	タ	
(池)	7	長者の池	二組の夫婦	別房木・久保村境の山	タ	
	8	勝負平の血洗池	喜田車山(勝負平)の跡	人次平石小山	タ	
	9	塩ヶ池	美しい娘・男	上田原	タ	
水	(湯) 10	信玄公のかくし湯	戦船の将兵	塩部(下部)の湯	タ	
	11	下部の湯	藤原修理大夫正信	下部の湯	野野大寺社縁由記(重高著)	
	12	兄弟湯	根原の人	中ノ倉峰	下部町誌	
(渓)	13	鬼ヶ瀬と紫雲の大淵	鬼草のお姫様	上之平の水神様	タ	
	14	蜘蛛沢	つりをする男・タセ	下部川金白沢	タ	吉田のモチーフを持った
	15	政経渓	横手の男政親	古閑川紙屋橋の下	タ	
(渓)	16	三条院渓	三条院真開	下岩沢の渓	タ	
	17	ダードブチ	名主六左衛門	東川法円寺下の渓	タ	
	18	お地蔵渓	お轍を泥きなかった人	切房木岩船地蔵堂	タ	丹波氷川・梅波氷川
(渓)	19	権現渓	女衆	消沢細尾地内の沢	タ	
	20	矢落沢	今朝印子(名利子)	八坂矢落沢	タ	
	(山) 21	湯之奥の大ガレ	美しい女	入ノ沢の奥	タ	湯之奥金山の伝説
山	22	法山	石者数人	法山	タ	
	23	たかげまこ岩	年寄	道下駄口向裏山	タ	越捨ての場所
	24	純ヶ霧	鏡子・庄次右衛門	常葉川東の山	タ	
塚	(塚) 25	地蔵峠	湯之奥金山の者	地蔵峠	満出博(T7生)	湯之奥金山の伝説
	(塚) 26	ヤンブイ塚	法印	上田原	下部町誌	
	(塚) 27	湯之奥の氏神		湯之奥	石部良生(S22生)	
祠	(祠) 28	瀬戸観音	武田信玄	瀬戸・中ノ倉	方外院住職	
	29	瀬戸觀音		長崎・河尻	タ	
	30	瀬戸觀音		瀬戸	タ	
堂	31	人肌觀音	武田信玄	タ	下部町誌	
	32	觀音堂		本栖湖畔觀音堂	赤池幹枝(M41生)	
	33	瀬戸觀音	武田信玄	本栖赤坂	下部町誌	
(神社)	34	方外院の鐘		本栖湖畔長崎	タ	
	35	お上人道	大泉寺住職・童子	杉山	タ	
	36	熊野神社	蘿原修理大夫正信	下部の湯	タ	
(神社)	37	若宮八幡宮	佐野庄五郎信義	常葉	タ	

	38	橋田の大神社	武田・今川軍	勝坂	"	
	39	牛首	戸部正門・正則・義高	山口	"	
(地)	40	湯之奥の地蔵		金山・ヒロネ	門西正勝	湯之奥金山の伝説
	41	輪なり地蔵	武田信玄	勝坂峠	下部町誌	
	42	和平のお地蔵様	周兵衛	一色和平	"	
	43	渡場の阿弥陀様	中ノ吉のねあさん	釜ヶ上手	"	
	44	道心平	御弟子の長者	御弟子道心平	"	
(家)	45	長者と味噌	長者のおばあさん	長者の家・本栖瀬	鳴沢村誌	参考資料
	46	名刀蛇丸	門西の先祖	波高島	下部町誌	
	47	門西の先祖	門西の先祖		蒲田博(T 7生)	
	48	門西家		湯之奥門西	門西三枝(T 3生)	
	49	武田信玄の名主	門西の先祖	"	"	
	50	門西家		"	門西正喜(S 13生)	
	51	門西門家		"	妙円寺住職	
	52	蒲田の先祖	蒲田の先祖	" 蒲田	蒲田博(T 7生)	
	53	旗の火	自体法印	道村の喜右衛門宅	下部町誌	
	54	鏡餅の変	久美村の名主喜右衛門	久美村の名主喜右衛門宅	"	
	55	赤池の先祖	赤池の先祖	釜ヶ上手村	赤池幹枝(M 41生)	
	56	墓地のくじ	"	"	"	
人	57	水必島	岩沢の農家の者	岩沢の農家	下部町誌	伝説化した昔話
(人)	58	孝行役人	木喰上人	丸畑	"	
	59	法印様	法印	切戸木	"	
	60	ねじり坊	法印	市之瀬	"	
(村)	61	湯之奥千軒		内山・中山・小屋金山	"	湯之奥金山の伝説
	62	中山千軒		中山金山	佐田武(T 2生)	中山金山の伝説
	63	閑所		順掛け地蔵の場所	"	
	64	川尻千軒		川尻金山	赤池幹枝(M 41生)	川尻金山の伝説
	65	"		"	下部町誌	"
	66	聾たれた美女	美女・聾師	桶代金山	"	桶代金山の伝説
	67	桶代山の神		"	岩倉正行	"
	68	大磯小磯部落	曾我氏・虎御前	大磯小磯	下部町誌	
	69	熊沢の里	熊沢信広・娘藤	熊沢	"	
	70	甲斐の築立て	釜ヶ上手の者	甲斐田境	赤池幹枝(M 41生)	

のほかの資料を補完して作成したものである。塙山市にかつて存在した黒川金山に関する丹波川「おいらん渕」の伝説はきわめて有名なものであるが、下部町域を含む東河内領の金山には黒川金山のように完成度の高い伝説は見い出すことができない。

「村」の項については、「湯之奥千軒」ないしは「湯之奥三千軒」、「中山千軒・入千軒」、「川尻千軒」と称する金山町(村)

の伝承が残り、少くともそれらの地にはかつて金山があったとする「村」の伝説が伝えられている。

伝説の主人公には、武田信玄、長者等が登場する。武田信玄については、自慢の愛牛にまたがり湯之奥の金山を視察した、というモチーフを持ち、伝承の上からは下部町域の金山は武田氏所有の金山と認識されていたことが理解される。金山と長者伝説との関係についても検討すべきであろう。南都留郡鳴沢村では、子の日と卯の日に味噌を取り出すことを禁忌とし、金の鶏が本柄湖と結びついて登場する長者伝説が採集されている。また、『下部町誌』の中には「朝日長者」の断片や「長者が池」あるいは埋蔵金を埋めた話などが掲げられるが、長者についての説明はない。しかしながら、東河内と駿河を画する天守山地一帯には「炭焼長者」をはじめとする長者伝説が濃密に分布することも事実である。黄金の埋蔵や金の鶏(鳩)が登場する伝説には金山との強いつながりが連想される。

山はまた里に住む者にとっては、畏怖するべき不思議な世界とも考えられていたようである。



入ノ沢の大ガレ

入ノ沢の大ガレが一夜にして出現したとする内山金山の話や柄代金山の「撃たれた美女」等の伝承は、より世間話に傾いて山の怪を説明している。

以上、第2次調査の概要を述べてきたが、金山の実態を探る手がかりのひとつとして、今後さらに調査を進めていきたい。

(1 杉本 仁、2 堀内 真)

VIII 第2次石造物の調査

今回の調査では、拓本取りと写真撮影の作業をおこなったが、下草刈り等で新たに3基の石造物が確認されたため合計9基となった。

七人塚にはかつて多くの石塔があり、それらのいくつかは里に運ばれ散逸しているが、現在も宝鏡印塔①と板碑型石塔②が立ち、その斜面下の谷内には五輪塔③と石室⑤、また上方の山道脇には五輪塔の地輪④が点在し、散在しているものの、この一帯は墓域としての様相を今に伝えている。ここは別に石塔類が集中するのがB区であり、B6テラスに光背型石塔⑦、B7テラスに石室⑧、その上方斜面に石塔⑥が現存する。七人塚周辺及びB区以外には現在石塔類は見られないため、地表面に残る石塔の分布から判明する中山金山の墓域は、大きくこの2ヶ所に限定されている。

五輪塔や石室には銘文が無いため時期を特定することはできず、両墓域の時期的な推移は厳密には把握できないが、石塔⑥と宝鏡印塔①は一年違いであり、両墓域とも17世紀後半であるため2つの墓域がその時期に共存したとみることができる。この地域に同時に2つの墓域が形成された要因については階層や集団の違い等が考えられるが、金山全体の各テラスの位置付けを把握するなかで今後さらに検討していきたい。七人塚の石塔はその昔は現在のテラスよりさらに上の斜面に設けられた狭いテラスにあったと伝えられ、B区でも石塔⑥は斜面に位置し、石室⑧もその付近から落ちたものと考えると、中山金山の墓域はテラス群周辺の斜面や小テラスを中心に選ばれて営まれたとみられる。

銘文について検討を加えると、まず板碑型石塔②は、ひげ題目から日蓮宗系のものであることは明らかである。また、宝鏡印塔①は、基礎部中央の「經」の陰刻から、上部に「妙法蓮華」の文字があったものと想定され、さらに戒名に「妙」の字が含まれることもあわせ考えると、石塔⑥とともに日蓮宗系のものとしてよからう。また、宝鏡印塔①と板碑型石塔②は、七人塚に並立していること、紀年銘の差が約6年しかないこと、戒名に「安」の字を共有していることから、一族、そしておそらくは夫婦かと思われる。とすれば、紀年銘から妻は先に死亡しているので、板碑型石塔②の「慈夫」は「慈父」の音通のあて字と考えられる。

次に、光背型石塔⑦は「花京宗春」と唯一四字戒名であり、宗派的な推測は今のところはつきりとはできないが、禅宗的な戒名のように思われる。また、個人の戒名と家の名が並記されることから、墓を個人の後生菩提に対するものから家に属するものとしてとらえるようになってくる時期や過程などを示唆しているように思う。いずれにしても、この塔だけは他の石塔から、造立の時期が30年ほど下るので、このあいだに改宗、入植等の変化があったのではないかと思われるが、今後さらに検討をすすめていきたい。ちなみに、「富士北山村」とは現在の静岡県富士宮市大字北山で、この中山金山からは南東約20kmの所に位置し、日興門流の北山本門寺があることで知られた村である。

(下々和 到・畠 大介・菊地大樹)

石造物一覧表														
番号	年号	形態・種類	銘文	所在地	備考	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
	明暦四						寛文四				明暦三	元禄一	一	一
	1658	西暦					1664				1657	1690	一	一
神双体道祖	石室	塔光背型石	宝鏡印塔 悲母妙安靈 明暦四戊戌 十月五日	七人塚	塔身部欠損 現存高一一八 cm	南無妙法蓮華經慈夫宗安 寛文四甲辰 九月十日	五輪塔	五輪塔	石室	石室	明暦三 六年	六月十四日	なし	なし
(未解説)	なし	為花景宗春 富士北山村 石河權兵衛家	元禄三年 庚正月 忌母妙養靈位	七人塚	塔身部欠損 現存高九三 cm	七人塚	七人塚下方 の谷内 の山道脇 の谷内 七人塚上方 の谷内 七人塚下方 の谷内	七人塚上方 の谷内 七人塚上方 の谷内 七人塚下方 の谷内	B7テラス	B6テラス	B7テラス	明暦三 六年	六月十四日	なし
地蔵峠	B7テラス	cm屋根部欠損 軸部欠損	高さ二七 cm	七人塚	現存高九三 cm	七人塚	七人塚下方 の谷内 の山道脇 の谷内 七人塚上方 の谷内 七人塚下方 の谷内	七人塚上方 の谷内 七人塚上方 の谷内 七人塚下方 の谷内	B7テラス	B6テラス	B7テラス	元禄三年 庚正月 忌母妙養靈位	六月十四日	なし



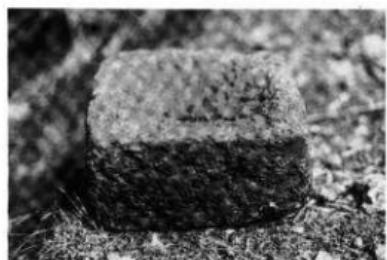
①宝鏡印塔



②板碑型石塔



③五輪塔



④五輪塔地輪



⑤石室



⑥石塔



⑦光背型石塔



⑧石室屋根部



⑨双体道祖神か



①宝盖印塔基礎部拓影



⑥石塔拓影



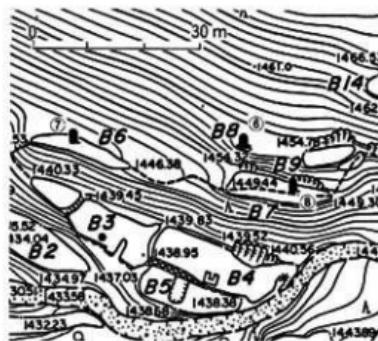
⑦光背型石塔拓影



②板碑型石塔拓影



七人塚周辺石造物位置図



B区石造物位置図

IX 地中レーダー探査報告

1 調査概要

(1) 調査件名

湯之奥金山・中山金山遺跡発掘調査 地中レーダー探査

(2) 調査目的

中山金山遺跡の発掘調査に関して、地中レーダー調査を実施し、今後の探査、発掘計画の参考とする。

(3) 調査場所

山梨県西八代郡下部町

(4) 調査方法及び機器

方法 電磁波を用いる、地中探査システムを使用

機器 地中レーダーK S D-8 無シールド

(5) 調査実施日

平成2年8月1日から8月5日

(6) 調査機関

湯之奥金山遺跡学術調査団

(7) 調査実施

テラ・インフォメーション・エンジニアリング



機材運搬風景

2 地中レーダー作業結果報告

現地踏査において、作業地区が作業上極めて困難を要する場所が多いため、安全上の問題からも、今回、E-2テラス、E-8テラス、A-46テラスおよびベースキャンプ付近のA-9+20・21・22テラスのデータを収集し、今後の物理探査機器の使用、改良手法などの問題について検討するものとした。

調査状況は、測線図に示すとおりである。

全体の状況として、遺構、遺物が存在しても、大半はデータから確認できない恐れがある。これは、探査環境の問題と、データなれの関係が難しかったためである。ただし、テラスなどの、およそその立地環境は判読できる。

以下にその状況を述べる。また状況報告図には、判読考慮できる範囲の内容を記した。

- (1) 探査した各テラスとも、埋め土による造成台地で、地山を削った様子は見られない。造成は一度に行われたのではなく、各ステップごとに拡大、積み上げられている。
- (2) E-8、A-46テラスでは、谷を埋めるときに作ったと見られる通水路らしき空洞が見られる。人工空洞として判断する基準は、地表部の変化で自然空洞の場合、地表部が沈下などの現象を呈するが、この地区はそれが見られないことによる。

また、昔日の土木における暗渠の構造は、極めて安全で、強いことが見られることからも、

土地の状態と条件から、人工空洞（暗渠）の可能性は高い。

このような場所では、深い発掘など極端な行為によるバランスの変化は、危険なので注意を要する。

以上のことから、極めて長期にわたる住居環境を求めたと見られる。

(3) ベース キャンプ付近 A - 9・20・21・22 テラスのデータから、旧谷は、もっと深く存在したものと見られる。

(4) 以上、1から3までのデータ内容から次のことが推測される。

テラスの土がすべて坑道関係の土砂かどうかということである。

テラスの数は非常に多い。この土砂は膨大で、現在確認されている坑道関係だけの土砂だけでは少ないようふられる。

今後、テラスが地山の開削

か盛り土かにより、土量の計算をし、発掘されている坑道関係との度量を比較することによるデータを利用し、土の動き方から、新たな坑道の推測もありえると考えられる。

(5) 今後の物理探査としては、坑道の多い稜線のデータを取ることにより、露天掘り跡、未発掘の鉱脈などの探査は可能かもしれない。また地中状況によっては、未発見の坑道の探査も可能とも見られる。

またいすれ、坑道直下の谷の堆積土についても、堆積内容の調査は必要となる。

谷の解明は、坑道鉱脈が発見される以前の、砂金採集史のテーマともなる。従って、簡易で性能の高い、他の物理探査手法の導入も検討したい。

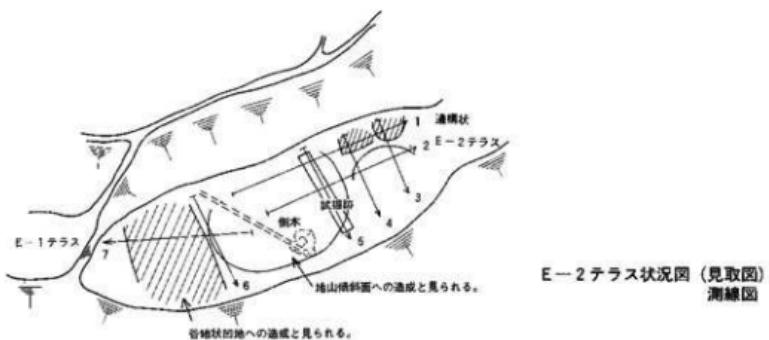
（渡辺広勝）



地中探査機器

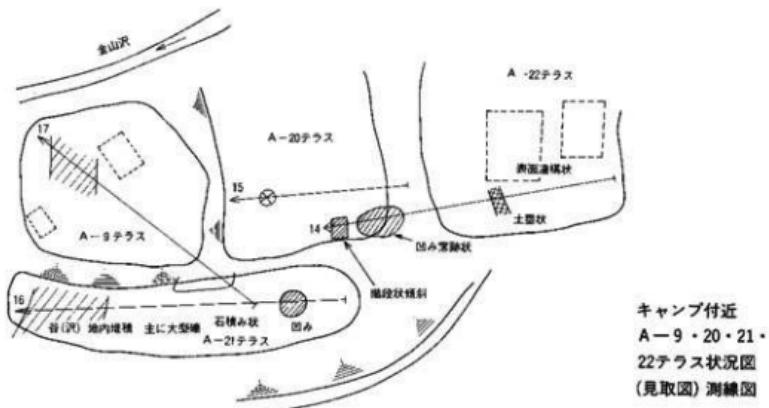
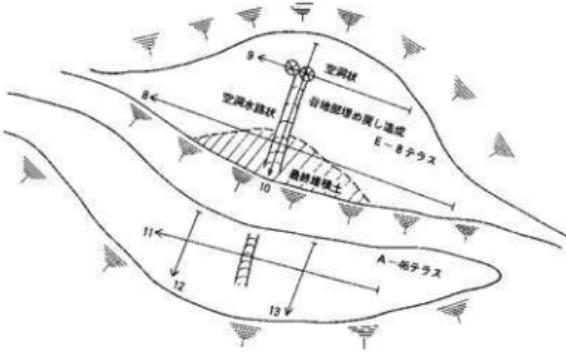


地中探査風景



E-2 テラス状況図（見取図）
測線図

E-8、A-46テラス
状況図（見取図）
測線図



キャンプ付近
A-9・20・21・
22テラス状況図
(見取図) 測線図

X おわりに

湯之奥金山遺跡の学術調査も第2年次を終え、新たに多くの重要な成果を得ることができた。その概要は、既に述べてきたとおりだが、ここで主な諸点を整理し、まとめにしたいと思う。

第2年次における最も大きな成果は、航空撮影などによる全体測量によって中山金山遺跡の全容の把握がおおむね可能となったことであろう。金山沢を中心に展開する124のテラスからなる平坦面域の様相や、主として尾根筋に存在する坑道等の諸遺構など、従来ほとんど未解明のままにおかれていった中山金山遺跡の全体像が姿をあらわしている。もちろん、この全体図が完璧というのではなく、今後の調査研究の進歩によってさらに手が加えられるであろうが、立地状況や遺構相互の位置関係、金山の歴史景観など、現段階でも評価の対象とすべき点も多く、湯之奥金山遺跡の実態を解明していくうえで、大きな前進となったことは間違いない。このように、全体構造がある程度明白になった金山遺跡は少なく、日本鉱山史研究に寄与する点は多大であると考える。

今回の調査では、中山金山遺跡が16世紀代に確実に経営を開始していることを物語る資料を得ることができた。明の染付頬で、中山金山衆の存在を示す古文書類とともに、戦国期の稼業は動かしがたい歴史事実となった。また、織部向付や祖母懐の茶壺の出土は、茶の湯をたしなむ階層の存在を示唆し、金山経営のあり方やそこに携わる人々の生活を彷彿とさせ、大変に興味深い。金山沢を中心に展開するテラス群が、相互にどのように補完しあっていたのか、その形成過程はどうであったか、個々のテラスの機能や性格はどうかといった諸点は、遺跡の規模が大きいだけに容易には把握しがたいが、二年間にわたる調査の所見から採鉱から精錬までの一貫した金山経営がしだいに浮き彫りになり、鉱山技術の分析・研究に好個の資料となっている。

石造物群は、七人塚周辺とB区に分布しており、17世紀後半に墓域がこの両地域に併存していたことを物語り、金山経営にあたる人々のあり方の一端を示している。そして、「富士北山村」即ち富士宮市側からの入山を刻するなど、金山遺跡の経営集団を探るうえに、残存する石造物群は多くの事を教えている。また今回は、坑道域の実態把握とともに、坑道も調査対象に加え検討を重ねた。その概略も報告されているが、12号坑道からの金粒の採取で金の産出を裏づけたり、坑道の形態や採鉱技術の研究にいくつかの成果と課題を生みだした。初めての導入である地中レーダー探査も、困難な作業環境下だったが、考古学調査に併行して実施した。これらの所見は、金山の形成のあり方に示唆的で、今後の調査にあたり有益な助言となろう。

湯之奥金山遺跡の調査も既に2年目を終了し、金山の規模、経営時期、経営のあり方や経営主体者等に関して1年次よりさらに多くの課題が生まれ、調査団の内部で種々論議が重ねられている。また、古文書班や民俗班からの報告のように、金山経営の変遷や社会組織がしだいに明らかにされつつあるものの、一方では多くの問題点も指摘されている。今後、これらの諸課題の解明に向けて、調査研究を一層充実し深化させる必要を痛感している。

文末ではあるが、第1年次調査に引き続き、第2年次でも地元湯之奥区・下部区を始め、町内各地域の方々、さらに飯沢林務事務所など多くの機関から多人なご指導とご協力をいただいた。深甚なる謝意を表する次第である。

(萩原三雄)

湯之奥金山遺跡学術調査会名簿

(平成3年3月31日現在)

会長 上橋精一（下部町長）

副会長 渡辺太郎（町議会議長） 半松秀太郎（町教育委員長） 太田芳雄（町教育長） 磐貝正義（山梨大学名誉教授・県立考古博物館館長） 野沢昌康（山梨県考古学協会会長）

理事 小林道昭 佐野 功 伊藤和男 伊藤良雄 猪野松市 服部治則 谷口一夫 萩原三雄 十菱駿武 笹本正治 堀内 真 伊藤 要

参与 望月正照 宮沢正成 赤池英至 上田 誠 渡辺 勉 板本美夫

委員 赤池 直 日向富士雄 佐野謙二 佐野洋一 二宮美仁 若狭富士雄 上田 誠

事務局長 加藤祥治

事務局 太田 弘 赤池義明 望月 融

調査協力員 浦川 博 門脇正勝 石部 栄 石部欣一 中野敏大 松永幹雄 赤池 篤 渡辺
弘貴 小林定雄 赤池 茂 芝原治一 今福 誠 岩倉正行 石部典生

湯之奥金山遺跡学術調査団名簿

団長 谷口一夫（帝京大学山梨文化財研究所所長）

副団長 清雲俊元

顧問 磐貝正義 野沢昌康 佐藤八郎 植松又次 服部治則 上野晴朗

調査員 萩原三雄 十菱駿武 小野正敏 笹本正治 秋山 敬 小和田哲男 安達 満 齋藤康彦 千々和到 藤澤良祐 葉賀七三男 堀内 真 長沢利明 杉本 仁 外山秀一 河西 学 柳原功一 宮澤公雄 平野 修 斎藤紳悟 堀内 亨 畑 大介 山下孝司 古谷健一郎 佐藤祐仁 堀内泉 敦野雅彦 上田 誠 谷口堅一 伊藤 要 二宮美仁 上田 茂 岩倉正行 依田三男 高橋 完 馬場 孝 岩倉叶一 赤池貴敬 旭 大三 竹之内博三 石部典生 中野敏夫 石部久寿 石部信博 依田 工 石部哲也 石部雅也 門脇 誠 佐野知世 望月賢二 望月明彦 鈴木勝治 加藤為夫 日向富士雄 佐野洋一 赤池 貞 若狭富士雄 佐野謙二 米川幸子

調査補助員 濱田正明 山梨学院大学考古学研究会々員 信州大学人文学部日本史研究室学生 山梨大学産業経済学研究会々員 東京大学考古学研究会々員 帝京大学考古学研究会々員 日本大学文理学部学生

協力者 佐野友一 渡辺昌志 上田文治 矢崎照政

事務局長 波木井市郎

事務局 黒石智子 中山千恵 広瀬千江美 稲葉彰子 日原ゆかり



湯之奥金山遺跡第2次調査概報

1991年3月31日発行

編集 湯之奥金山遺跡学術調査団

〒406 山梨県東八代郡石和町四日市場1566

帝京大学山梨文化財研究所内

発行 湯之奥金山遺跡学術調査会

〒409-29 山梨県西八代郡下部町常葉1023

Tel 0556-36-0011

印刷 デザインオフィス WITH

〒400 山梨県甲府市大里町3727-4

Tel 0552-41-4242